

# 東アジアにおける文化比較・文化脈絡で考える茶・茶文化

西村昌也, 大槻暢子, 篠原啓方, 岡本弘道

三宅美穂, 宮嶋純子, 熊野弘子, 氷野善寛, 佐藤実

## Tea and Tea Culture in the Cultural Context and Comparison of East Asia

NISHIMURA Masanari, OTSUKI Yoko, SHINOHARA Hirokata,  
OKAMOTO Hiromichi, MIYAKE Miho, MIYAJIMA Junko,  
KUMANO Hiroko, HINO Yoshihiro, SATO Minoru

東アジアの核地域（中国，朝鮮，日本，琉球，ベトナム）では，非常に長期に亘って茶飲が行われ，それぞれの文化伝統に根ざした茶飲文化が発展してきた。本稿は，文化のハードとソフトの相関性（1．現代社会における茶飲の軽便化，2．9-10世紀の茶器（中国・越州窯製品など）の輸出期にともなう茶飲文化の伝播，3．17-18世紀の煎茶文化の世界的普及），茶産業が起こした文化変化，言葉と茶あるいは茶器の関係，茶導入時の在地文化の反応，茶と宗教あるいは儀礼，女性とお茶などをテーマに，東アジア各地域を中心に一部は東南アジアやヨーロッパも含めて行った文化比較論である。

キーワード：茶文化，文化比較，文化のソフトとハード，言葉と茶，茶器，儀礼と茶，女性と茶

### 1. はじめに

本論で主たる議論対象とする日本・琉球・朝鮮・中国・ベトナムは，東アジア地域の核地域として認識され，中国のある地域から茶飲の習慣が伝播・定着し，現在もその習慣を維持している地域である。また，単に茶飲の習慣のみならず，茶木の栽培を行い，茶や茶飲をめぐる文化において類似した歴史・文化背景を有している。しかし，その一方で，類似する故に見落とされやすい歴史・文化的差異も多いと思われる。

周知のように，茶飲や茶文化を世界史研究の脈絡で比較文化史的に興味深い議論を提出されてきたの

が、角山栄氏<sup>1)</sup>の先駆的研究である。そして、茶文化の東西比較文化論・比較史的研究は、諸外国でも行われるようになっていく<sup>2)</sup>。また、近年の日本では、増加し続ける考古学資料と文献資料の両面から茶文化を歴史的に研究したもの<sup>3)</sup>や茶文化を総合的に追求した研究<sup>4)</sup>も多い。茶飲文化は東アジア地域を中心とした比較文化や学際研究のテーマとして、非常に面白いものである。

本論では、東アジア核地域を主眼として、東南アジア諸国やヨーロッパとの比較を補足しながら、茶文化をめぐる比較を行い、中国内地で花開いた茶文化の各地域における歴史・文化的適応、茶文化や茶産業が引き起こした文化変化などを論じ、茶文化がもつ普遍性あるいは地域的特殊性、さらには茶を起点にした比較文化に基づいて、本学拠点が目指す“文化交渉学”形成への有効な視点提供を行いたい。

## 2. 茶飲から考える文化の伝播と変容

### 2.1 茶飲の軽便化・ソフトドリンク化

角山栄氏の近著<sup>5)</sup>では、イギリスと日本を題材に、現代社会における伝統的な茶飲文化が、ソフトドリンクの進出に影響され、縮小傾向にあることを認め、その背景として、イギリスでは、ビクトリア朝時代以来のEnglish breakfast, Afternoon teaや夕食を家族一緒にとる習慣、日本では、“茶の間”における家族の団欒をもつ習慣がともに消滅しつつあることを読み取っている。この原因として、ファーストフードや外食産業の発達、女性の社会進出や家の中に子供の個室が成立することに伴う家族としての共有時間の減少を挙げている。

こうした社会変化が茶飲文化を変えていくことは、イギリスの過去の社会においても指摘されている。18世紀後半のイギリスでは、すでに紅茶に砂糖を入れて飲む方式が確立されていたようだ<sup>6)</sup>。この背景には、当時の労働者階級が、職場に行く前後の朝食として、手間のかからないパンと砂糖入り紅茶という簡便な食事形式を好んだことが指摘されている。産業革命後の工場労働は、朝から時間の規定通りに働ける労働者を必要とし、ハイカロリー・カフェイン含有の砂糖入り紅茶が、必要アイテムになったという議論もある<sup>7)</sup>。この飲食文化の確立は、結果的にカリブ海における砂糖生産のための奴隷貿易を発展させ、最終的には、カリブ海の黒人奴隷の生産した砂糖と中国の貧しい農民が生産した茶が世界で最初の工業化を支えたことになる<sup>8)</sup>。

1) 代表的著作は、角山栄『茶の世界史：緑茶の文化と紅茶の社会』中公新書、1980年、角山栄『茶ともてなしの文化』NTT出版、2005年など。

2) 増淵 宗一、『東西喫茶文化論——形象美学の視点から』、淡交社、1999年。Mair, Vicor, H. & Hoh, Erling 2009 “The true history of Tea. Thames and Hudson”, 忠平美幸訳『お茶の歴史』、河出書房出版社、2010年。ピアトリス・ホーネガー 2010 平田紀之訳『茶の世界史：中国の霊葉から世界の飲み物へ。』白水社。

3) 谷晃『茶会記の研究』2001年、淡交社、水上和則、『茶文化史にそった中国茶碗の考古学』、勉誠出版、2009年など

4) 代表例は野村美術館発行の各研究紀要。

5) 角山栄、前出、2005年。

6) ホーネガー、前出、2010年。

7) 川北稔、『近代世界システムの中の砂糖：「世界で最初の工業化」の一要因』『at』7号：35-43頁、2007年。

8) 川北稔、前出、2007年。

紅茶を最初にティーバック化したのはイギリスで、1896年には特許が取得されているが、1900年代のアメリカはそれを取り入れ改良し、すぐに大量流通させている。ニューヨークで茶の試供品を提供する際に、量的節約を目指して、絹の小袋に茶葉を入れたものが、やがてティーポットに入れるティーバックとして転用されたらしい。これがやがて、インスタント・コーヒーと競合する形で発達し、茶葉の消費量増加と低品質な茶葉の商品化も可能にしている<sup>9)</sup>。一方、イギリスではティーバッグの大々的普及は1970年代以降のことであった<sup>10)</sup>。

缶やペットボトルによるお茶の出現は、即飲可能な飲料としてのお茶を手軽に持ち運び可能にしたことに大きな意義があるが、このソフトドリンク化したお茶がもたらしつつある文化変化は、茶の文化的意義<sup>11)</sup>をどのように考えるかによって、意義付けが異なる。茶を飲料の選択肢の一つとして単純に捉えるなら、軽便な即席飲料として茶は進化していると考えられる。しかし、茶飲が人をもてなすための文化と考えるなら、この変化はむしろ、文化的な大きな省略化あるいは喪失へと向かっているといわざるを得ない。

また、日本より早くお茶をソフトドリンク化し、普及させた事例はインドネシアのジャワにおける Teh Botol (瓶入り茶：1970年より生産) であろう<sup>12)</sup>。ジャワ島は、植民地時代にオランダのプランテーションにより茶栽培が始まったところで、茶飲の習慣がジャワ人に根付いて、さほどの年数が経過しておらず、茶飲に関する伝統的かつ特異な文化の発達も認めがたい。そのような状況において、瓶入り茶が、急速に広まった背景には、冷飲料としての簡便性が受けたことに他ならない。茶飲を文化的にどのように位置づけるかによって、茶がどのように商品化・飲料化されていくかを表す事例である。ペットボトルに代表される日本のお茶のソフトドリンク化も、もてなし文化としての茶の役割が薄れてきたことの証であろう。

## 2.2 ハードとソフト一体で伝わる茶文化

### 2.2.1 9-10世紀：東アジア茶文化に共通する最初の連動的変化

中国においては、唐末から宋代にかけての茶生産の拡大が認められている<sup>13)</sup>。9世紀は、東アジア・東南アジア地域の交易が活発化し、中国から越州諸窯の青磁、邢州の白磁、長沙同官窯の諸製品が各地域に輸出され始めた時代である。『茶経』（760年頃成立）は、越州の青磁や邢州の白磁を茶器の碗として賞賛している。

日本の9世紀において、輸入陶磁の主を占めるものは越州窯青磁であり、緑釉陶器として尾張などで模倣生産されている。9世紀の尾張猿投窯での緑釉碗生産は嵯峨天皇期に代表されるように、天皇の家

9) ホーネガー、前出、2010年。

10) Mair, Vicor, H. & Hoh, Erling 2009 The true history of Tea. Thames and Hudson 忠平美幸訳『お茶の歴史』2010年、河出書房出版社。

11) 角山、前出、2005年。

12) Evi Mariani “Local preference for tea puts Coca-Cola in cold sweat.” <http://old.thejakartapost.com/yesterdaydetail.asp?fileid=20050903.Q06%20>, 2005年。

13) 水野正明「宋代における茶の生産について」『待兼山論叢』17, 1983年、25-52頁。

政機関による管理生産にあったと理解されている。嵯峨朝期は喫茶の風習が盛んで、『延喜式』の尾張からの貢納規定のなかに“茶碗”が存在し、記載の茶碗の寸法規格が尾張産緑釉陶器のそれと一致する。さらには平安京で、嵯峨天皇と関連する遺跡で出土していることから<sup>14)</sup>、尾張産緑釉やそのモデルとなった越州窯青磁碗などが茶碗として使われていることは確実と考えられる。

朝鮮では、新羅時代末期から高麗時代初頭にかけて、遣唐使が茶を持って帰った記述や唐で禪宗を学んで帰った禅僧と茶の関わりを示す記述が多い。また、高麗都城などから、越州窯青磁などが出土しており、その模倣生産は確実に10世紀までに遡ることが理解されている<sup>15)</sup>。

ベトナムにおいては、北部バックニン（Bắc Ninh）省のドゥオンサー（Đương Xá）窯址において、少なくとも10世紀には、越州窯を模倣した自然釉碗や托台、薬研の生産が確認され、それまでに一般的であった広東系の陶磁器製作伝統とは一線を画している<sup>16)</sup>。同じ頃、当時の豪族拠点として“茶郷”<sup>17)</sup>という地名が出現している。こうしたことから、茶碗による茶飲の風習が中国から伝わっていたと考えて問題はない<sup>18)</sup>。9-10世紀は、国際交易の活発化に伴い越州窯碗などを中心に、中国陶磁などの茶器を使った茶飲の習慣が周辺諸国に広まった時代と考えていいのであろう。

## 2.2.2 煎茶文化の世界的普及

煎茶法（広義の）は世界的に普及した茶飲の方法であるが、その起源地である中国では、文人生活や仏教寺院と密接に結びついていた<sup>19)</sup>。

日本で、煎茶を本格的に伝えたのは黄檗宗開祖の隠元（1592-1673年）とされる場合が多い。隠元は明末の福建省福州に生まれ、若いときに仏前に献茶を行い大衆に茶を供する茶頭<sup>さじゅう</sup>を普陀山で勤めている<sup>20)</sup>。隠元自身、試茶や新茶を詠んだ詩などを残しており、茶好きであったことが理解でき、宇治・万福寺には、隠元が用いたとされる宜興窯の茶罐が伝世している。近年の京都や長崎の考古学データは、宜興窯茶罐や涼炉の年代上限を17世紀後半まで遡らせており<sup>21)</sup>、寛文（1661-1672年）年間に狩野常信が写したとされる『盧全煎茶図』には、涼炉や茶銚（急須）が描かれている<sup>22)</sup>。隠元が直接関係したかは別とし

14) 尾野善裕「嵯峨朝の尾張における緑釉陶器生産とその背景——平安時代初期の喫茶文化との関わりを通して——」『古代文化』526号、2002年、638-646頁。

15) 南秀雄、「円山里窯跡と開城周辺の青磁資料」『東洋陶磁』22号：105-120、1992年、Lee Jong Min “The Formation and Expansion of Early Korean Celadons” *Art History Association of Korea* 240, 2003, pp54-57. 李鍾致, 「韓国初期青磁の形成と伝播——埴築窯と土築窯を中心に——」『美術史学研究』, Vol.240, 51-75, 2003。

16) Nishimura Masanari and Bui Mih Tri “Excavation of Duong Xa Kiln site, Bac Ninh Province, Vietnam.” *Journal of Southeast Asian Archaeology*. No.24 : 91-131, 2004.

17) 『大越史記全書』。

18) 本紀要の西村論文参照。

19) 本紀要の井上論文参照。

20) 平久保章『隠元』吉川弘文堂、1962年。

21) 稲垣正宏「遺跡出土の煎茶道具——西日本——」『野村美術館研究紀要』16、2007年、135-144頁、鈴木祐子「遺跡出土の煎茶道具——西日本——」『野村美術館研究紀要』16、2007年、145-163頁、ならびに本紀要の稲垣論文参照。

22) 城市真理子「室町水墨画の「煎茶」——文人図様をめぐって」『野村美術館研究紀要』16、54-81頁、2007年。

て、同時期に中国から煎茶道具が輸入され、茶器として根付いたことが理解できる。ちなみに宜興窯の朱泥茶器は、明の万暦年間頃より小型茶壺として生産が発展している<sup>23)</sup>。

また、茶産地として有名な肥前出身の高遊外（売茶翁：1675-1763年）も、黄檗宗寺院で修行後、京都の辻において茶具を担ぎながら茶を広めている。後に煎茶を極めた文人の一人として有名な頼山陽（1780-1832年）は、茶籃（旅行用の煎茶セット）を携帯して旅したことが知られている<sup>24)</sup>が、こうした携帯可能な煎茶具が開発されたからこそ、抹茶に対してよりシンプルな煎茶が普及したとも考えられよう。

また、ベトナムでは、范延琥（1766-1832）による『雨中隨筆』のなかの「茗飲」で、中国の煎茶文化について簡単に触れ、康熙（1662-1722年）年間以後、点茶が瀹茗に変わったこと、茶碗は小碗で薄いものが好まれていたことなどを記し、さらには景興（1740-1786年）年間に中国の蘇州製火爐が伝わり、茶飲で接客する際の必需品になったことなどを伝えており、文人茶的な茶飲風習の勃興を伝えている<sup>25)</sup>。出土資料においても、17世紀後半以降生産されるベトナム陶磁器は精細を欠くようになり、中国陶磁が価値的にも上に置かれ始めたと考えられる。17-18世紀に比定可能な涼炉や急須などもあることから、日本同様、新参の茶器と共に茶飲が変化した可能性は十分ある。また、推測を重ねているにすぎないが、蓮の実の砂糖漬けや緑豆の粉菓子など、日越あるいは中越共通の菓子もあり、茶菓子の一部もこの頃広まったのではないかと推定している。

また、茶飲文化が皆無に近いタイにおいても、ラタナコシン朝と縁の深いバンコックの仏教寺院においては、仏僧間に位階に応じた茶器を使い分ける茶飲習慣が根付いている（写真3参照）。こうした仏教寺院には、18世紀以降の中国陶磁が大量に伝来しており、そのなかに茶器も含まれることから、茶器の伝来と茶飲の風習がセットであったことを推察させる。

ヨーロッパでは中国から茶飲が17世紀に伝来した時に、茶碗や茶罐も一緒に輸入しており、オランダなどでは宜興窯の砂壺や景德鎮の碗など大量の中国陶磁や日本陶磁が出土している。やがて、17世紀末頃からティーカップ（把手なしの小碗）とソーサー（受け皿）の組み合わせが普遍化し、ヨーロッパでの茶具セットとして定着する<sup>26)</sup>。中国や日本には、カップとソーサーを組み合わせる陶磁器例は当時存在しないが、18世紀以降の中国では、カップとソーサーのセットで生産・利用されていることが確認される。VOCの交易品の研究では、こうした茶器は注文に応じたものであり、文様や形態まで注文されていたことが明らかとなっている<sup>27)</sup>。従って、ヨーロッパからの注文生産がきっかけとなって、逆に中国に根付いた陶磁器利用形態と結論できる。同じ変化の構造は把手付きのカップ（1730年代以降出現）についてもいえる<sup>28)</sup>。

23) 中村喬「泡茶法の隆盛と宜興茗壺」『立命館文学』10・11・12, 1983年, 46-67頁。

24) 佃一輝『煎茶の旅——文人の足跡を訪ねて』大阪書籍, 1985年。

25) 本紀要の西村論文参照。

26) 堀内秀樹「十七から十九世紀の東洋陶磁とヨーロッパ市場の動向——沈没船引揚げ資料の器種組成の検討か」小林克編『掘り出された都市——日蘭出土資料の比較から』日外アソシエーツ, 2002年, 109-132頁

27) 本紀要の桜庭論文参照。

28) 松井かおる「ティーポットを用いる茶について」小林克編『掘り出された都市——日蘭出土資料の比較から』日外アソシエーツ, 2002年, 171-209頁。

イギリスでは伝統的にソーサーにカップの紅茶を少し移してソーサーから飲むという習慣があったようで、18世紀の絵画やチャールズ・ディケンズの作品の挿絵にソーサーで飲むシーンが描かれており、20世紀にもその習慣は残存していた<sup>29)</sup>。この習慣は、イギリスのみならず、17-18世紀ヨーロッパ各国に見られたが、やがて消えていく<sup>30)</sup>が、これは角山<sup>31)</sup>が論じたテーブルマナーの形成時期とも重なってくるのではないだろうか。また、その習慣はパキスタンやバングラデシュなどにもある<sup>32)</sup>。また茶にミルクを入れる習慣も VOC から中国へ派遣されたオランダ人使節団のコック長による記述が初出で、17世紀後半には、ヨーロッパに広まったとする説がある<sup>33)</sup>。こうしたことから、ヨーロッパでは、現在行われている茶飲のマナーや茶具セットは18世紀を初現とすることができよう。

### 3. 茶産業が起こす変化

静岡は古くからの茶栽培地であるが、大規模に発展したのは明治維新後である。明治維新後、旧士族の授産政策として、水利に恵まれない牧ノ原などの台地を開墾し、そこに茶畑を造成した。侠客、清水次郎長なども開墾事業に参加・貢献している。元幕臣の多田元吉は、静岡で茶畑開墾に参加後、勸業寮官僚として中国やインドでの茶業調査を行い、静岡で製茶技術普及に努めている<sup>34)</sup>。

製茶されたお茶は、静隆社などにより横浜港へ運ばれ輸出されていたが、鉄道の敷設により不利となると、官民を挙げての清水開港運動を起し、清水港開設（1896年）によるアメリカなどへの直接輸出が急伸する<sup>35)</sup>。また、静岡から清水への鉄道敷設により、製茶地から荷積み港への輸送が簡便となる。こうした運搬経路の整備により、日本一の輸出業績を積み上げるようになった。

雲南の大規模茶業発展は、雲南南部の普洱域で生産された茶が、漢人商人により清代の交通路整備のおかげで雲南より北に運ばれ、中国内地でもその価値が注目され、大量の買い付けが始まる。そして、1729年の普洱府設立による直轄領化により、清朝による貢茶や茶税の制度が開始されるのは、官による茶の生産・流通管理を通じた利益独占を狙ったのが理由と考えられるが、実際には、大量の漢人入植が進み、官民を問わず大量の買い付けが進んでいく<sup>36)</sup>。しかし、茶の商取引には末端の役人や流官による搾取、粗悪品へのすり替え、不当な茶税などが頻発し、茶を栽培していた在地非漢民族（ハニ族、ラフ族など）社会との間にストレスを引き起こし、民族社会の清朝への反乱につながり、さらには後代におけ

29) 小野二郎 『紅茶を受け皿で：イギリス民衆芸術覚書』 晶文社、1981年。

磯淵猛 『一杯の紅茶の歴史』 文藝春秋、2005年。

30) 本紀要の桜庭論文参照。

31) 角山、前出、1980年。

32) 大村次郷、高橋忠彦、小西正捷、加藤九祚、松原正毅 『いっぶくの情景：「嗜み」からよみとく現代アジア』 千里文化財団、2008年。

33) 春山行夫 『春山行夫の博物誌 VII 紅茶の文化史』 平凡社、1993年。

34) 角山、前出、1980、川口國昭・多田節子 『茶業開花：明治発展史と多田元吉』 全貌社、1989年。

35) 大石貞男 『日本茶業発達史』 八坂書房、1985年。

36) 本紀要の西川論文参照。

る植生単一化につながっていく<sup>37)</sup>。

台湾茶業は、清代に台湾と対岸福建省などとの間で商業取引が行われていた時に、台湾産品として砂糖や米と共に茶が存在していた。1858年の天津条約による台湾府と淡水の開港がきっかけで、台湾北部での生産が適していた茶は世界市場へ進出する<sup>38)</sup>。特に淡水は茶輸出に特化し、台湾経済成長に大きく寄与する。なかでも発酵度をウーロン茶より低く抑え、香り付けをした包種茶が、厦門経由で東南アジアの華僑向けに特化されて輸出されている<sup>39)</sup>。そして、烏龍茶の輸出が不振になるのとは逆に、包種茶が輸出台湾茶の主を占めるようになる<sup>40)</sup>。当然その発展には台湾・大陸中国・東南アジアを結ぶ華人のネットワークが寄与した。台湾茶業史においては、茶の高地における大規模栽培化に際して、雲南同様、在地の非漢民族との間にどのような文化・経済摩擦が起きたかは、今後検証すべき課題でもある。

（西村昌也）

## 4. 言葉と茶

### 4.1 茶＝茶ではない

茶の字、言葉を使ったからといって、茶葉を使った飲み物を必ずしも指さない場合があることには、注意しておきたい。

例えば、中国では“茶水”とホテルなどで注文すると単なるお湯が出てくるときがある。茶水は過去においては、茶と水という意味で使われていた可能性があるが、現代においては飲みものとしての“お湯”という意味で使われている場合が多い。朝鮮で穀茶といえ、穀類を混ぜたお茶かと思いきや、お酒である。またベトナムでは、チャー（Chè）は茶を指すが、もう一つの意味として、緑豆や果物を“ぜんざい”状に煮込んだデザートの意味もある。日本や沖縄でも、ハトムギ茶、麦茶、桑の葉茶、うちん茶なども、茶葉はまったく用いていない。朝鮮の場合、『林園十六志』（1789年に表された農書）などに、すでに茶葉を用いない茶が紹介されている。これらの例はそれぞれの国・地域の文化史的な興味深い違いを表している。

日本の場合、茶のように煎じたり煮出したり飲む飲み物を、ある時期から“●●茶”と呼ぶようになっている。同様な傾向は中国の『飲膳正要』（1330年成立）などにも確認できる。19世紀半ばに中国にコーヒーが入ってきたときも、訳語として珈琲茶という語が用いられている。ベトナムのぜんざい状のチャー（Chè）に関しても、同様の変化の可能性を考えなくてはならない。17世紀初頭、イタリア人宣教師マテオ・リッチは、中国での茶飲に関して、茶のなかに乾燥果実や砂糖漬けの果物が入っているものを飲んでいる。現在でも竜眼茶など、乾燥果物を湯で煎じたものが中国にある。ベトナムのチャーも、こうした飲用習慣から始まって甘味食品へと特化した可能性があるだろう。

37) 本紀要の増田論文参照。

38) 河原林直人『近代アジアと台湾：台湾茶業の歴史的展開』世界思想社、2003年。

39) 松浦章「日本統治時代台湾における包種茶の海外販路」『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学研究叢刊、2003年、375-405頁。

40) 河原林、前出。

## 4.2 茶を表す言葉について

中国古代において、茶に多くの異名（茶、茗、檟など）があったことは『茶経』（760～780年頃に成立）などが伝えるところである。日本では、最近辞書類分析から平安時代中期に編纂された『和名類聚鈔』（931年から938年の間に成立）には、これらの茶の異名は収録されておらず、平安時代前半の喫茶文化導入において、茶器や茶樹は伝わったものの、文献的情報は限られており、茶経も伝わっていないのかという議論や『広本節用集』（15世紀半ば成立）に多量の茶の異名が掲載されていることから、15世紀後半になると中国の茶文化を膨大に摂取したのではないかとする議論が提出されている<sup>41)</sup>。

矢沢<sup>42)</sup>、内田<sup>43)</sup>によれば、西洋人は、武彝（Bohea, 武夷）、工夫（Congou, Congo）、小種（Souchong）、白毫（Pekoe, Pecco）などを Black Tea と呼び、中国側の記録では黒茶とされ、松蘿（Songlo）などの非発酵茶を Green Tea と呼び、中国側の記録では緑茶あるいは青茶とされている。しかし、1840年代には、Black Tea に代わる言葉として紅茶が出現する。Robert Fortune は、『Three Years Wanderings in the Northern Provinces of China.』（1847年）のなかで、Hong-cha（紅茶のこと）と Luk-cha（緑茶のこと）を記録し、上海開港初期の中国商人記録（1844年）のなかにも出現する<sup>44)</sup>。ちなみに Robert Fortune は、『Visit to the Tea-Districts of China and India』（1852）を著し、緑茶と紅茶が製法の違いに由来することを明らかにし、茶木の種の違いとされてきたリンネ（Linne：スウェーデンの植物分類学者）の分類の修正につながった<sup>45)</sup>。

その後、英華辞典にも、紅茶は1869年出版の『A vocabulary of the Shanghai Dialect』に、上海語として出現する。また、上海で創刊された月刊誌や新聞にも1850年代以降登場するようになっており、おそらく商品の価値を上げるため、上海を中心とした茶商人側からの意図で、紅茶という言葉が使われはじめと考えられている。日本では1874年には、京都府下の製茶会社が雇った中国人からの聞いた言葉として、「赤茶」の言葉が使われ、明治政府がその種子獲得に動き、殖産興業の一環で「紅茶製法書」を出版し、紅茶生産を起こす動きが始まる。紅茶ということで、赤く着色した粗悪品まで輸出されたようだ<sup>46)</sup>。

いわゆる現在の「紅茶」は、現在の中国・台湾地域では、紅茶と呼ばれており、韓国では1990年代までは英語では Black tea、漢字では紅茶の表記を使い、ベトナムは現在でも Chè đen（チェー・デン：黒茶）を利用している。つまり、紅茶は中国・台湾地域、朝鮮、日本などで、最終的には西洋人が好む種の発酵茶系の茶を総称する言葉として定着したと理解できる。

41) 高橋久子「日本の古辞書に見る茶の異名」『アジア遊学』116, 2008年, 44-53頁。

42) 矢沢利彦『西洋人の16-18世紀の中国女性』東方書店, 1990年。

43) 内田慶市「「黒茶」から「紅茶」へ」『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学東西学術研究所研究叢刊17, 2001年 内田, 前出。

44) 内田, 前出。

45) 横内茂「チャ節の分類史略（1）」『齋田茶文化振興財団紀要』4集, 2000年, 49-60頁。

46) 川口・多田, 前出。



#### 4.3 茶店を表す表現

茶を飲む場所の表現に関しても興味深い変化が見てとれる。京都の茶屋、台北の華西街などの茶館は、茶飲み場所を名目として、女性接待などの別業を行っているものである。日本では、すでに江戸時代の江戸には、本来の湯茶接待からはずれた茶屋（料理茶屋、出会い茶屋）などが出現している<sup>47)</sup>。

珈琲を飲む喫茶店は、日本最初のコーヒー喫茶店は、長崎通詞家の鄭永慶が留学後、1888年上野に開店した“可否茶館（かひいちゃかん）”である<sup>48)</sup>。鄭は、中国の茶館やパリのカフェにあこがれて、この店を単にコーヒーを飲む場を飲む場所ではなく文化交流の場としようと目論んでいる。1911年、パリのカフェを模倣して、銀座のカフェ・プランタン（Café Printemps）が出現するが、洋酒を飲ませる場であった。これは、当時のフランスのカフェもコーヒーを飲む場から酒場へ変質していたものが多かったからである<sup>49)</sup>。しかし、同時に純粋にコーヒーを飲ませる目的のカフェ“カフェ・パウリスタ（Café Paulista）”なども出現し、文藝活動の場になっている<sup>50)</sup>。しかし、大正時代以降、カフェは酒場、風俗営業の場に変質していった。これに対抗して、純粋なコーヒーを飲む場所として“喫茶店”なる呼称が出てきたとされる。しかし、これにも“特殊喫茶”などという怪しい存在が登場し、その特殊性と区別すべく“純喫茶”が出現したとされている<sup>51)</sup>。

#### 4.4 言葉と器物：茶碗

中国の『茶経』では、茶飲の器として碗の旧字“盥”と“甌”を紹介している。また、最近、インドネシア・スマトラ沖の沈船、“黒石号”（9世紀前半）で出土した長沙窯系碗は“茶盞子”と内面中央に鉄絵で釉下に書かれており、小型の茶碗に対して盞も使われたことが確実となった<sup>52)</sup>。この盞はその後、宋代に建窯産の碗（いわゆる日本での天目碗）等に用いられている。

ベトナムでは、“碗”はさほど根付かなかったようで、北部ベトナムでは、“盞”がベトナム語化した言葉“chén”が小型の飲器的碗や杯に使われている。また、飯茶碗程度のものは“bát”と呼ばれ、これは“鉢”である。同様のパターンは朝鮮でもみられる。鉢は、仏教における梵語 patra に対する訳語“鉢多羅”由来の語と考えられ<sup>53)</sup>、ベトナムや朝鮮における仏教文化の深い根付き方を示している。

日本語では、現在茶碗といえば、茶道的茶飲場面以外ではご飯を食べる碗を意味している場合がほとんどであろう。茶碗（あるいは茶椀、茶碗）の初出に関しては、<sup>54)</sup> 貞観13年（871）の「安祥寺伽藍縁起資財帳」や天暦4年（950）「仁和寺御室御物実録」には「茶椀」の言葉が使われており、『延喜式』民部

47) 増淵 宗一、前出、山田新市『江戸のお茶：俳諧 茶の歳時記』八坂書房、2007年。

48) 星田宏司『日本最初の珈琲店』いなほ書房、1988年。

49) 鹿島茂「カフェ＝珈琲を飲ませる場所とはじめ」『東京人』153、2000年、53-59頁。

50) 増田周子「大阪におけるカフェ文化と文藝運動」竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』思文閣出版、2008年、222-244頁。

51) 鹿島、前出。

52) 謝明良「記黒石号（Batu Hitam）沈船中の中国陶瓷器」『美術史研究集刊』13号、1-60頁、2002年。

53) 宮嶋純子氏のご教示による。

54) 谷見氏（野村美術館）のご教示による。

下、年料雑器には、尾張と長門から進上される瓷器のなかに「茶碗」という品目が出ている。「盞」や「甌」は鎌倉時代には使われているが、16世紀以降、特殊な例を除き使われなくなるようである。その背景には、茶の湯の普及により「茶碗」の語の使用が一般的になったためと考えられている。ところで、「茶碗」が「飯茶碗」を指すようになった背景には、茶碗で茶飲も行い、飯食も行う二重用途、さらには煎茶の普及により茶飲は煎茶碗<sup>55)</sup>や湯飲み等別の器具で行うようになったことがあろう。

(西村昌也、氷野善寛、篠原啓方)

## 5. 茶を導入するときの反応：薬か害か？

茶が薬としていつから議論され認識されてきたかを中国の医書、とりわけ本草書から検証する。唐の陸羽『茶経』にも、本草書が多く引用されている。中国における種々の本草書は、以前の本草書を含めた上で、新たに書き足す体裁である。

最初期のものとされる魏の『神農本草経』や、梁の『本草神農経集注』には、茶の記載は見られない。魏晋代のものとされる佚書『神農食経』には、長らく服用すれば心身ともに気力が充実し、心が楽しくなるものと述べられる。同じく佚書の華佗『食論』では、前向きな心が生じるとされる。

次いで、唐代の『新修本草』(659年成立)では、茶(茗)の性質はわずかに寒で、無毒であり、痔疾に効き、利尿作用があり、痰や熱・渴きを取り去り、眠気をさますとされている。

『本草拾遺』(739年成立)では、脂を取り痩せると記載されている。また、後の『本草別説』、次いで『医学入門・本草』(1575年成立)、『本草綱目』(1590年成立)、『本草易読』(1694年成立)では熱毒に対しての効果が説かれる。

さらに後代の『随息居飲食譜』に、肝を冷やす作用、『臟腑藥式補正』には目をつかさどる作用があるとされる。『湖南藥物志』には、血に関する記述がある。これら本草書から窺えるのは、ストレスや怒りなどにより、肝気が上昇するという性質が強まり、頭目へ症状をもたらし、また、肝火上亢の状態となる。茶は、肝気上昇に対しては、上昇した気を降ろし、気ののぼせによる頭目への症状を和らげ、肝火上亢に対しては、体内の火に対し、寒の性質が鎮めるということでもあろう。また、肝の働きがよくなれば、疏泄作用の働きがよくなり、全身に気血がめぐり、そのため、経絡を調べるとされている。

日本では、『吾妻鏡』(1300年頃成立)によれば、『喫茶養生記』(13世紀初め成立)は、将軍源実朝の宿酔に対し、栄西が茶と共に献上したものとされている。『喫茶養生記』は上巻「五臓和合門」で茶の薬効や製法を説き、下巻「遣除鬼魅門：病のもとである妖怪変化を除去する偏」で、桑の木からつくる桑湯の薬効を説いたものである。

西洋では中国でのキリスト教伝道者が、中国や日本の生活習慣などの紹介で、飲茶の習俗を紹介しており、薬草あるいは薬効のあるものとされている<sup>56)</sup>。

55) 本紀要の稲垣論文参照。

56) Cruz, Gaspar da 1570 Tractado em que se contam muito por estenso as cousas da China, e assi do Reyno Dormuz. Reprinted in 1829 and 1937. 日埜博司訳『十六世紀華南事物誌』明石書店、リッチ・マッテオ 川名

茶に関して薬か害かの論争。オランダでは、ニコラス・ディルクス（Nicolas Dirx 1593-1674年）が、1641年に『医学論（Observationes medicae）』で、コルネリウス・デッケル（Cornelis Decker）医師が1685年にハーグで『素晴らしき香料，茶に関する小冊子：Tractaat van het excellente kruid thee』で、茶の有益性を訴えている<sup>57)</sup>。その一方、Leidenの医師ヘルマヌス・ブールハーヴェ（Hermanus Boerhaave）のように茶に反対し、滋養に富むビールを勧めたものもいた<sup>58)</sup>。

長崎で訳されたオランダの家庭百科事典の訳書『紅毛本草 下巻』（江戸時代1783年：Rembertus Dodonaeus 著『Harbarius oft Cruydt-boeck』の翻訳）では、コーヒー（古蘭比以）が薬としての扱っており、さらに、大概玄沢など蘭方医が、薬として紹介している<sup>59)</sup>。

ヨーロッパ諸国と比較すれば、東アジアでは茶を害ある飲み物とする議論が起こっていないことが、理解できる。これは東アジア地域では本草学などに代表されるように、薬用植物を煎じたりして飲用する文化が根付いていたからであろうか？

（佐藤実，熊野弘子，西村昌也）

## 6. 「茶」と宗教・儀礼

本章は、茶の歴史的な受容と普及をふまえながら、中国・朝鮮・日本における宗教や宮中儀礼のなかで、茶がどのように取り入れられているかについて史料を収集し、物質文化の継承の諸相を考察する。

茶は宗教のなかでも仏教と深く結びついていることは、中国、朝鮮、日本、琉球、ベトナムにおいて古くから認められ、茶文化導入に大きな役割を果たしてきている。しかし、茶文化の宗教や儀礼における根付き方に関しては相違もみられ、今後の比較研究からその変容過程、原因について理解できることは多いと思われる。

### 6.1 茶の受容と展開時期

中国において現在確認できる史料上の飲茶の歴史は、前漢に始まり、三国時代の呉、さらに西晋、東晋において茶が飲まれていた。南北朝期に入ると、茶の生産地である南朝における飲茶の習慣と北朝での飲茶の蔑視がみられる<sup>60)</sup>。しかし、茶が幅広い層の人々の日常の飲料となったのは、唐代に入ってから

---

公平訳『中国キリスト教布教史 一』大航海時代叢書，岩波書店，ルイス・フロイス『日欧文化比較』大航海時代叢書，岩波書店，1965年。

57) 角山，前出，1980年，Blussé Leonard 1989 *Tribuut aan China: vier eeuwen Nederlands-Chinese betrekkingen*. Otto Cramwinckel Uitgever, Amsterdam. 深見純生，藤田加世子，小池誠訳『竜とみづばち：中国海域のオランダ人400年史』晃洋書房，2008年。

58) 角山，前出，1980年。

59) 日本コーヒー史編集委員会編『日本コーヒー史』全日本コーヒー商工組合連合会，1980年。

60) 東魏・楊衒之撰『洛陽伽藍記』卷三，報德寺条「肅初入國，不食羊肉及酪漿等物，常飯鯽魚羹湯飲茗汁。京師士子，道肅一飲一斗號為漏卮。經數年已後，肅與高祖殿會，食羊肉酪粥甚多。高祖怪之謂肅曰，卿中國之味也，羊肉何如魚羹，茗飲何如酪漿。肅對曰，羊者是陸產之最，魚者乃水族之長。所好不同並各稱珍以味。言之甚是優劣，羊比齊魯大，魚比邾莒小國。唯茗不中與酪作奴。高祖大笑」（『大正新脩大藏經』卷51，1011頁中）。

である<sup>61)</sup>。封演『封氏聞見記』巻六、飲茶条には、開元年間（713-741年）以降、山東地方から長安にいたるまで飲茶は広まったという<sup>62)</sup>。八世紀中葉には、唐代の具体的な茶の知識を記す、陸羽（733-804年）『茶経』が成立している<sup>63)</sup>。製茶法や茶器などの説明により、唐代における茶の実態について貴重な情報を得ることができる。

朝鮮においては、9世紀（統一新羅時代）に茶の受容が確認される。『三国史記』には、全羅南道地異山に唐から持ち帰った茶の種を植える記事がある<sup>64)</sup>。また、『三国遺事』は、8世紀半ばのこととして、仏に茶を供えた僧侶の話を伝えている<sup>65)</sup>。高麗時代（918-1392）には、国家の儀礼・祭祀において茶礼が行われ、遼や明の使節を迎える外交儀礼の中にも茶礼が存在した。朝鮮時代（1392-1897年）においても、宮中で様々な茶礼が行われていた<sup>66)</sup>。

日本においては、8世紀後半に現れる特殊な器形の緑釉陶器から喫茶の受容を読み取る報告もあるが<sup>67)</sup>、史料上で確認できるのは九世紀初頭である。勅撰漢詩文集には、815、816（弘仁5、6）年に、天皇や貴族と最澄・空海といった入唐僧との交流において飲まれる茶などが詠まれている<sup>68)</sup>。また、『日本後紀』弘仁6（815）年4月癸亥条には、茶を入唐僧が天皇に供している記事があり<sup>69)</sup>、弘仁6年6月壬寅条には、畿内、近江、丹波、播磨等の国に茶の栽培と毎年の献上を命じている<sup>70)</sup>。さらに、大内裏の東北隅には茶園があり<sup>71)</sup>、宮廷内での確かな需要が想定できる。このように日本においては、入唐した僧侶がもたらす茶を宮中で受容していった様子があとづけられる<sup>72)</sup>。また、この時期の喫茶の有力な物証としては、越州窯系青磁碗を模倣した尾張産緑釉陶器碗（9世紀前半）が指摘されている<sup>73)</sup>。

茶について8～10世紀の中国・朝鮮・日本を中心におっていくと、茶の幅広い層に定着した唐と、そ

61) 矢野仁一「茶の歴史について」（『茶道古典全集』巻の一、創元社、1936年）。

62) 唐・封演撰『封氏聞見記』巻六、飲茶条「南人好飲之，北人初不多飲。開元中，泰山靈巖寺有降魔師，大興禪教，務於不寐。又不夕食，皆許其飲茶。人自懷挾到處煮飲，從此轉相倣效，遂成風俗。自鄒齊滄棣，漸至京邑城市，多開店鋪煎茶賣之，不問道俗投錢取飲其茶。自江淮而來舟車相繼，所在山積色額甚多」。

63) 布目潮風「『茶経』著作年代考」（『布目潮風中国史論集』下巻、汲古書院、2004年初出1957年）。

64) 『三国史記』巻第10新羅本紀第10、興徳王3年（828）冬12月条「（新羅興徳王）三年…，冬十二月，遣使入唐朝貢。文宗召对于麟徳殿，宴賜有差。入唐廻使大廉，持茶種子來，王使植地理山。茶自善徳王時有之，至於此盛焉。」

65) 『三国遺事』巻2 景德王 忠談師 表訓大徳，巻3 生義寺石弥。

66) 金巴望「高麗・李朝の喫茶文化と歴史」（『茶道学大系 第七巻 東洋の茶』淡交社、2000年）。詳細は、本紀要の篠原論文参照。

67) 巽淳一郎「日本における茶法の開始」（『新版古代の日本』6〈近畿Ⅱ〉角川書店、1991年）。

68) 『文華秀麗集』梵門，答澄公奉献詩一首 御製。（小島憲之『日本古典文学大系69 懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店、1964年、257-258頁）。『経国集』七言與海公飲茶送歸山一首 太上天皇。（小島憲之『國風暗黒時代の文学』中下（Ⅱ），塙書房、1986年、2603-2606頁）。

69) 『日本後紀』弘仁6（816）年4月癸亥条。

70) 『日本後紀』弘仁6（816）年6月壬寅条。

71) 『西宮記』（Saikyuki）巻八諸院事「茶園在主殿寮東」。

72) 村井康彦『茶の文化史』（岩波書店、1979年）などを参照。

73) 尾野善裕「嵯峨朝の尾張における緑釉陶器生産とその背景——平安時代初期の喫茶文化とその関わりを通じて——」（『古代文化』54-11、2002年）。

こから入唐使や入唐僧を介して茶を受容した朝鮮・日本がある。以下では、受容当初の朝鮮と日本で茶とのむすびつきが語られる、僧侶の中国における茶との関係について述べたい。

## 6.2 僧侶と茶

上記『封氏聞見記』では、唐の開元年間（713-741年）に泰山靈巖寺の降魔師が座禅の眠気を除くために茶を用いたことが、飲茶流行の契機となったという。しかし、実際にはそれ以前から、茶は僧院において日常的に飲まれていたようである。開元年間以前に成立した仏教文献、特に律典類にはしばしば僧院における飲茶について言及されている。例えば、道宣（596-667年）『教誡新学比丘行護律儀』在院住法第五には、新学の比丘が寺院に住むにあたって受け取る食物のなかに塩と並び「薬茶」が記される<sup>74)</sup>。義浄（635-713年）は、『南海寄帰内法伝』に僧侶が口にする飲食物の一つとして「茶」をあげ<sup>75)</sup>、また同『受用水要行法』にも、僧侶の用いる浄水に「煮茶」をあげている<sup>76)</sup>。一般に茶が普及したと考えられる時期よりも早く、すでに僧院では開元年間以前に飲茶の習慣が浸透しつつあったと考えられる。

唐・宋代における僧侶と茶については、日本人僧侶の中国巡礼日記である円仁（794-864年）の『入唐求法巡礼行記』や成尋（1011-1081年）の『参天台五臺山記』などより具体的に知ることができる。両日記には、唐・宋代における僧侶の日常に頻繁に茶が飲まれていたことが記されている。『参天台五臺山記』には、喫茶と喫湯がセットとなった飲み方がみえる。喫茶と喫湯を組み合わせた作法は、宋代において宮廷、官衙だけに限らず僧俗どちらにも広く行われていたことが指摘されている<sup>77)</sup>。喫茶・喫湯は、禅僧の日常規範を記す清規のうち現存最古である、宋蹟『禅苑清規』（1103年序文）にもみられる。『禅苑清規』は、その後の諸清規の基本として後世への影響は大きく、日本にも将来され、鎌倉初期の禅林の修道生活に影響を与えた<sup>78)</sup>。その後、日本においても清規が編纂されていくが、そのなかにも喫茶・喫湯は取り込まれている。このように禅宗の清規にみえる喫茶・喫湯は、宋代の中国で僧俗を問わず広く行われていた茶礼の慣習であり、それが清規における禅僧の生活規範に組み込まれ、日本の禅林においても受容されていた。また、葬儀における茶を供える儀礼も清規に記され、そうした禅宗における葬儀の荘厳は後世の諸宗に影響を与えたことが指摘されている<sup>79)</sup>。

中国において8世紀半ば以降、茶は広く日常の飲料として普及していた。しかし、朝鮮や日本における茶の受容にあたっては、その物質としての茶だけでは広まらず、宗教、特に仏教における用い方、あり方が茶の受容に大きな影響を与えたのではないかと思われる。

次に朝鮮・日本における茶の受容と展開を示す、茶が用いられる宮中儀礼について述べたい。

74) 唐・道宣撰『教誡新学比丘行護律儀』在院住法第五（『大正新脩大藏經』巻45, 870頁下）。

75) 唐・義浄撰『南海寄帰内法伝』巻二、第十七、知時而禮（『大正新脩大藏經』巻54, 218頁上）。

76) 唐・義浄撰『受用水要行法』（『大正新脩大藏經』巻45, 903頁上）。

77) 田中美佐「宋代の喫茶・喫湯」（『史泉』66, 1987年）。

78) 今枝愛真「清規の伝来と流布」（『中世禅宗史の研究』東京大学出版会, 1970年）。

79) 原田正俊「中世の禅宗と葬送儀礼」（『前近代日本の史料遺産プロジェクト 研究集会報告集2001-2002』東京大学史料編纂所, 2003年）。

### 6.3 宮中儀礼と茶

日本において9世紀初頭の茶の受容にあたっては入唐僧との関係が深く、天皇や貴族層との交流から宮中に取り入れられていった。古代日本において茶が用いられる宮中儀礼に「季御読経」という宮中に僧侶を召して大般若経を転読する仏事がある<sup>80)</sup>。大般若経の転読は古くより行われるが、宮中での恒例儀式となったのは、9世紀中葉である。大般若経は、災害消除など広く国家鎮護を目的に転読されたが、恒例となってからは、内廷的な儀式となっていった。成立当初は、春夏秋冬の四季に挙行されたが、9世紀後半には春秋二季に変更された。「季御読経」において「引茶」といわれる宮中で僧侶が茶を施されることは、10世紀後半～13世紀初頭まで確認されている<sup>81)</sup>。

朝鮮においても、茶の受容期ともいえる統一新羅時代には、僧侶とのかかわりが多くみられる。9世紀末の禅僧の碑には、国王の下賜品や贈答品、葬儀における供養物として、茶が登場している<sup>82)</sup>。宮中儀礼として茶が本格的に登場するのは高麗時代である。『高麗史』には、いわゆる国家において挙行される五礼のうち、吉礼、凶礼、賓礼、嘉礼の四礼において茶礼が登場する。

一例として、高麗王朝独特の儀礼（嘉礼雑儀）である「仲冬八閏会儀」を取り上げてみる。八閏会はもともと、中国において仏教徒が齋会を守る儀礼として始まったものであるが、唐代以降は飯僧儀礼の法会となった。だが、高麗における八閏会儀は、法会の名称のみが残り、天靈、五嶽、名山、大川、龍神をまつる儀礼（『訓要十条』）へと変容しており、さらにその内容は、高句麗（紀元前2世紀～668年）の国中大会（東盟）以来の伝統と認識されていたようである（『高麗図経』）。儀礼は仲冬11月に挙行され、臣下の王への祝辞や宴の際、茶が振る舞われた。このように高麗の茶礼は、仏教儀礼、賓礼、そして節会などにも取り入れられている。一方、日本においては、少なくとも節会では茶は飲まれていない。ここに日本と朝鮮における茶が登場する儀礼に違いがみられる。

また、高麗の国家儀礼における茶や酒の法式は、『宋書』の礼志にみられる内容に類似し、宋代の国家儀礼を継承している可能性がある。だが一方で、高麗太祖は儀礼を唐制にならうよう指示しており（『訓要十条』）、唐礼における茶礼の存在にも注目しておく必要がある。唐代の国家儀礼における茶礼については、不明な点が多いが、陝西省扶風県法門寺塔出土の茶道具は宮廷の工房で製作されたものであり、宮廷内で用いられる茶を考える手がかりになる<sup>83)</sup>。

### 6.4 小結

8世紀半ば以降、茶は中国において幅広い社会層に定着し、9世紀前葉には朝鮮・日本において受容された。朝鮮や日本においては、茶の受容にあたり僧侶の存在が重要な役割を果たしている。僧侶と茶の関係は、中国において8世紀前半にはみられ、その後も僧侶の日常には茶は浸透していた。また、宋

80) 倉林正次「季御読経考」（『饗宴の研究』歳事 索引編、桜楓社、1987初出1980年）。

81) 中村修也「宋以前の茶」（『茶道学体系 第二巻 茶道の歴史』淡交社、1999年）。

82) 「寶林寺普照禪師彰聖塔碑」（884年）、「雙磎寺眞鑑禪師大空塔碑」（887年）、「月光寺圓朗禪師大寶禪光塔碑」（890年）、「朗慧和尚白月葆光之塔碑銘」（890年前後）、「深源寺故國師秀澈和尚楞伽寶月靈塔碑」（893年）などが、そうした例である。

83) 『唐皇帝からの贈り物』（新潟県立近代美術館、朝日新聞社、博報堂、1999年）。

代に広く僧俗に行われていた喫茶・喫湯は、茶礼として禅宗の清規のなかに組み込まれ、禅宗の影響力とともに茶の受容にあたって大きな役割を果たした。

宮中儀礼においては、日本（10世紀～13世紀）と朝鮮（10世紀～14世紀）における茶の用いられる儀礼に違いがみられた。朝鮮と比べ日本における茶は、儀礼のなかで仏教とのかかわりがより深い飲料であったことが考えられる。今後、唐・宋代の儀礼での茶のあり方や仏教以外の要素も視野にいった考察を課題としたい。

（大槻暢子・篠原啓方・宮嶋純子）

## 7. 女性とお茶

### 7.1 はじめに

茶は飲み物としては、習慣的には酒ほど性差が現れにくい飲料である。しかし、日本では近年まで“お茶くみ”が想起させる性別が女性であったことなどに代表されるように、お茶は女性が出すものという既成概念が存在した。対照的に、ベトナムでは現在でも、男性が積極的にお茶を客に出す習慣が強く、近年までカフェは男性世界の性格が濃かった。従って、本章では、ジェンダーから茶文化を比較してみたい。

### 7.2 中国女性とお茶

中国では、女性が家の外に出ることが少なく、家の中でも女性が接客をすることはないとセメード（17世紀）など西洋人宣教師が報告している<sup>84)</sup>。

明清時代における茶文化を探る材料の一つとして、当時に書かれた章回小説（回数を分けて記述する文体の長編小説）が挙げられる。『紅樓夢』（清代乾隆帝期に成立）では清代前期の貴族家庭が、『金瓶梅』（明代嘉靖・萬暦年間に成立）では明代の富裕商兼官僚家庭が、『鏡花縁』では清代における市民の生活がそれぞれ描かれている。『金瓶梅』の西門家では普段緑茶を飲んでいるように、茶を飲む習慣はこの時代には一般化していた。中でももっとも頻繁に登場する場面は来客があれば茶をもてなす「客来敬茶」の場面である。この習慣には階級男女の別はなく、女性が茶と関わる場面も少なくない。例えば、『紅樓夢』第四十一回には、貴族特有の凝った演出で、茶を振舞う場面がある。『金瓶梅』第二十一回でも西門家内で雪見を行った際に、呉月娘が手ずから雪を集め、江南の鳳団雀舌牙茶を振舞うという場面がある。『鏡花縁』（1828年刊行）第六十一回では紫琮と十人の才女が茶を飲みながら茶についての知識について語り合う場面がある。このように、上流階級の女性は「客来敬茶」の場面でも教養が求められていた。しかし、同じ客人でも客人の階級によって使用する茶や水、道具の区別を行っていた。『紅樓夢』第四十一回で、最も身分の高い人物である賈宝玉の祖母にはひときわ上等な茶托と茶碗を使用しているのに対し、身分の低い劉婆さんが使った茶碗を妙玉は外の間に置いておくように指示している。このことからたとえ上等な茶碗でも劉婆さんが口をつけた茶碗だからもういらないのだな、と賈宝玉は推

84) 矢沢利彦、1990年『西洋人の16-18世紀の中国女性』東方書店。

測している。

しかし、これはあくまでも「内」の話である。では「外」において女性が茶を飲むようになったのはいったいいつ頃だろうか。一つの資料源として茶館があげられる。茶館といえば、老舎の『茶館』（1957年）が有名である。『茶館』はある茶館の清末から抗日戦争後までを描いた作品であるが、ここで登場する女性は、娘を売り飛ばそうとする百姓女、家が没落したので女給として働くことになった少女など、客として訪れるものはいない。当時、茶館といえば純粋に茶を飲むだけではなく、商売を行ったり集会を行ったりする場でもあった。そのため、やってくる客は大半が男性であり、一般の女性が訪れるような場所ではなかった。ただ、昔からの習慣にとらわれないような女性が上流階級の使用する茶楼・茶園・茶庁などに出入りすることもあったという議論もある<sup>85)</sup>。1900年代に入ると、女子教育も次第に盛んになり、海外へ留学する者もあり、このことも無関係とはいき切れない。また、少し特殊な例として、蘇州の茶館があげられる。この地は江南の文人やお金持ちが住む所で、茶館が大変繁栄した地であり、相談したいことがあれば、女性でも茶館で茶を飲むことができたという<sup>86)</sup>。これは蘇州の風俗習慣によるものであるが、封建社会を保つために茶館への婦女の出入りを厳禁した布告が道光十九年（1839年）には出ている。その後もいくつか同様の布告が出ているものの、女性が茶館に出入りすることは黙認されていた。このように、一部の特殊な地域を除くと、清末民初はまだ女性が「外」でお茶を飲むというのは一般的ではなく、より後の時代に一般化したと考えられる。

以上のように、「内」における茶との関わりは男女の差異はないと考えられるが、「外」における茶との関わりは長い間、男性のみに限定されるものだったようだ。「外」において女性が茶と関わり始めるのは中国の近代化が進んでいくのと、ほぼ同時期だったのではないかと推察する。茶を通じて、「内」に閉じ込められていた女性が「外」へ出て行く過程が読み取れると考える。

### 7.3 沖縄の茶文化とブクブク茶：ジェンダー的視点から

沖縄には、ブクブク茶という泡を食べるお茶がある<sup>87)</sup>。日本全国にかつて分布していた「振茶」の一種である。ブクブク茶は、明治、大正、昭和の初期、主に那覇の中流以上の家庭で飲まれ、女性のための飲み物との認識があったことが知られる<sup>88)</sup>。ブクブク茶は、煎米湯（いりごめゆ：煎った米を煮出した湯）と清明茶（しーみーちゃ：清明の時期に収穫された茶とされる）や番茶などの茶を大きな木鉢（ブクブクーザラ）に入れ、大きな茶筌（約22cm）で泡立ててつくる。その立てた泡を、少量の赤飯とお茶を入れた碗に盛って食べるのである。その道具はかなり大きなものであるが、茶筌の存在から日本の茶道文化との関連も想起させる。

85) 王笛 小野寺史郎（訳）「茶館・茶房・茶客——清末民国期の中国内陸都市における公共空間と公共生活のミクロ的研究」『中国（China）』19号、2004年。

86) 鈴木智夫「清末浙江の茶館について」酒井忠夫先生古稀祝賀記念の会編『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集——』529-540頁。

87) 沖縄の茶業・茶文化に関しては、本紀要の大槻論文、宮嶋論文、岡本論文を参照。

88) 伊波普猷「ブクブクー——琉球における一種の茶道——」（『伊波普猷全集』第10巻、平凡社、1976年、初出1933年）、東恩納寛惇「ぶくぶく茶考」（『東恩納寛惇全集』第5巻、第一書房、1978年、初出1939年）。



琉球における日本の茶道文化については、1534年に琉球に来た冊封使・陳侃は円覚寺における茶席を描写して「台子に風炉を設け、湯をわかし、沸騰する頃あいに、茶碗に抹茶を一匙もり、そこへ湯をそそぎ、茶筴でたててからややあって客にすすめる。その味は、はなはだ清らかであった。」と記す（『使琉球録』使事紀略）。当時、琉球においては日本人禅僧の渡来や琉球の僧侶の五山留学が盛んであり、日本の茶道文化はまず禅僧の往来の中で取り入れられたのである。

1600年には泉州堺の人、喜安蕃元が琉球に渡り、国王の侍従官になるとともに「茶湯宗職」に任じられている。また向象賢「羽地仕置」において士族に奨励された「諸芸」の中には、「茶道」も含まれている。近世琉球においては、日本との往来の中で求められる教養として、茶道が位置づけられていた。

一方、庶民を含めた近世琉球期の社会全般では、中国・福建省から輸入した茶葉が大量に消費されていたことが知られている。これらはもちろん抹茶ではなく煎茶であり、18世紀中葉以後の統計から毎年十～数十トンの茶葉の輸入が確認できる<sup>89)</sup>。これらの需要の増大を受けて、琉球各地でも茶樹の栽培・製茶が行われた。このような中国茶を中心とした喫茶文化は、前述の士族文化としての茶道文化とは区別して考えるべきであろう。

また、女性に特有の喫茶文化として、ブクブク茶の原型とも言える「振茶」の習俗が既に存在していた。1757年に土佐に漂着した琉球船からの聞き書きである『大島筆記』（おおしまひっき）の琉球風俗に関するくだりには、「年配の婦人は煎茶を振て飲む事、日本田舎の如し」（『大島筆記』人物風俗）とある<sup>90)</sup>。また明治前半の首里方言を収める『南島八重垣』にも「ブクブクチャー」として、「泡茶也。昔は盛んに行はれたるよしなれども、今は稀也。」とある<sup>91)</sup>。これらのことから、近世後半期には首里・那覇の女性社会を中心にブクブク茶、もしくはそれに連なる泡茶（振茶）が飲まれていた可能性は高いと思われる。

現在のブクブク茶は、戦後に習俗として一度途絶えた。昭和30年代、復元に着手したのが新島正子氏（沖縄調理師専門学校校長）である。その後、安次富順子氏（沖縄調理師専門学校副校長）とともに研究を重ねて昭和50年代に蘇った。そして、1992（平成4）年には、両氏の関わる沖縄伝統ブクブク茶保存会が発足し、復元したブクブク茶を観光の波にのせることなく保存、継承することを理念に活動する<sup>92)</sup>。

また一方で、ブクブク茶を茶道として振興することを目指す「古琉球茶道ブクブク茶あけしの会」がある。「あけしの会」は1992年に発足し<sup>93)</sup>、2000（平成12）年にはNPO法人となっている。このように現在のブクブク茶はその担い手の広がりをみせ、復活、継承されつつある茶文化といえる。

89) 真栄平房昭「中国茶と日本茶」（『琉球を中心とした東アジアにおける物流構造』2005（平成17）年度～2007（平成19）年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、2008年）。

90) 前掲真栄平論文49頁。

91) 山内盛熹遺稿・伊波普猷補注「南島八重垣——明治初年の琉球語彙——」（『方言』4-10、1934年）。

92) ブクブク茶に関する安次富氏の著作は、安次富順子『ブクブク茶』ニライ社、1992年、『絵本 おきなわブクブク茶物語』（沖縄伝統ブクブク茶保存会10周年記念事業委員会、2003年）などがある。

93) 同年には「あけしの会」の教本である、あけしの会（編）『琉球ブクブク茶道』編者刊、1992年）が出版されている。

#### 7.4 朝鮮

朝鮮時代には官職として茶を扱う女性が存在した。茶母は、宮中・官衙などで茶礼を担当した女性である。しかし、時代が下るにつれ身分が下がり、宮中の外では茶妓、茶姫、茶婢という名称も登場し、賤しい身分のものとみなされるようになったし、茶母自身、都城の外や地方では遊女を指す言葉としても使われた。男子の茶母も時代が下がると登場した。また、妓生（芸者）も、男性の遊戯の趣味に合わせ、詩文や茶・酒・舞などを学んだため、茶についての知識もあったものと考えられる。

両班家（高麗・朝鮮時代の文官と武官の総称）においても、男性が茶を飲めば幼いころから茶に親しむことができるが、女性自身が主導的に茶を楽しむのは困難であった。茶を入手するのが困難な時期があり、入手すれば惜しみつつ飲み、女性にまでゆきわたるのは困難であった。学識を高く評価され、茶を詩に詠んだ女性も存在したが稀である。これは、茶を楽しむ男性が、風流を楽しむため、技芸に長けた遊女と遊んだためである。学問をたしなみ、茶を楽しんでそれを詩に残す行為は、当時儒家の女性には認められなかった。

#### 7.5 ヨーロッパと日本

ヨーロッパでは、もたらされた当初こそ、少量故に高価で、上流階級でしか飲まれなかったが、東インド会社（VOC）の輸入競争などにより茶の価格が下落し、庶民の飲み物となる。オランダでは、当初、茶店で飲まれていたが、やがて紳士淑女が友人宅に集まり、利き酒のように各種の茶を試したり、茶会が行われるようになり、女性が家の外で、女性同士で交際できるきっかけを作り、女性解放へ寄与したと考えられている<sup>94)</sup>。その一方で、ヴィクトリア朝のイギリスでは、おいしくお茶をいれることは主婦のたしなみであったとされる<sup>95)</sup>。また日本の場合、お茶は中世以降、男女を問わず広く飲まれていたようであるが、茶道自体は男が作り出した世界であり、江戸初期においては、わずかな例を除き、女性とはほとんど無縁であったとされる。しかし、京都などの芸者が男性接待のために茶道を身につける習慣があり、そこから女性への茶道普及につながったのではないとする議論<sup>96)</sup>があり、興味深い。ところで、明治維新以降の近代女子教育形成時には、茶道が華道とともに、正課ではなく礼儀作法やしつけのための教育科目として挿入されている<sup>97)</sup>。これが、やがては女性の花嫁修業やたしなみ事として普及し、現在に至っているわけである。すでに、幕末には、武家女性ながらも茶道の師匠が出現しており<sup>98)</sup>、1874年から1年半日本に滞在したロシア人メーチニコフは、抹茶の茶飲を日本の良家夫人の楽しみとしている<sup>99)</sup>。従って、明治維新以前に女性と茶道やあるいは茶接待に関する作法に関して、関わり方の変化が起きて

94) Blussé, 前出。

95) 角山, 前出, 1980年。

96) 増淵 宗一, 前出, 1999年

97) 小林善帆「教育としての「花」——「花」「茶」はどのようにして女性のなすべきものとなったか——」（『野村美術館研究紀要』15, 2006年）, 13-40頁。

98) 小林, 前出。

99) メーチニコフ・レフ・イリッチ著, 渡辺雄司訳『亡命ロシア人の見た明治維新』東京, 講談社, 1982年）。

いる可能性がある。小林<sup>100)</sup>は華道に関して、江戸後期に町人の娘の稽古事として取り入れられたことを挙げ、これが近代以降の女子教育に登場する伏線になると推察している。江戸時代後半の女性教育のための絵図資料<sup>101)</sup>には、茶道もたしなんでおいた方がよいという記述が出現し、また同時に、茶や酒の出し方や飲み方に関する作法の案内が詳述されており、そのなかには客にお茶をだす作法も含まれている。従って、江戸後半期に女性の茶道や華道の関わりに関して、漸次的な変化が生じ、女性がお茶を入れて接客をするという観念も、この頃より成立していったものと考えられるのではないだろうか？

## 7.6 小結

ヨーロッパでは茶飲が、女性解放の方向に影響したのに、日本ではむしろ茶飲を、女性を男性へ服務させる文化に結びついて発展した側面がある。これは、茶道の性格と女性教育両方からの影響と考えられるが、基本的に両者共に男性が作り出したものであるから、日本男性が日本女性にもとめる願望が結実したものといえる。

その一方で、女性社会特有の茶文化の形成も、日本には存在することも興味深い。

日本各地に現存する振茶は、富山県の「ばたばた茶」、島根県の「ぼてぼて茶」、愛媛県の「ぼて茶」、鹿児島県徳之島の「フィチャ」などがある。これらの多くに共通する特徴として、女性の会合と結びつく形で継承されていることが挙げられる。いわゆる茶道が主に男性の文化として発展したことに対し、対照的な存在と言えようか。また、ブクブク茶については那覇でも中流以上の女性の飲み物とされているが、これも近世琉球の茶道文化があくまで士族男性のハイカルチャーに留まっていたことと対をなすものとするのが穏当であろう。その意味で、ブクブク茶はジェンダーとハイカルチャーの境界面に生成した、一種の「あわい」の文化として位置づけることもできよう。

（岡本弘道，大槻暢子，宮嶋純子，三宅美穂，篠原啓方，西村昌也）

## 8. まとめ：文化交渉学のための視点

いくつかの現象・事項に沿って、茶飲や茶をめぐる文化の比較や各地域例の俯瞰を行ってきた。こうした比較や事例追求で認識できたことを簡単にまとめて、結語としたい。

茶飲自体は、万人に受け入れやすい飲み物ゆえ、東西を問わず非常に普遍的になっているが、東アジアにおいては、茶飲のハードとソフトが一緒になって伝わっている場合が多いようだ。これは、茶器と製茶法や茶飲法のみならず、仏教をはじめ、宗教や儀礼上の位置づけを伴った茶飲習慣が複数国間にみられることから頷ける。今回は取り上げなかったが、朱喜の『家礼』の中にも茶礼が位置づけられており、朝鮮では、それがかなり正確に受け継がれ、ベトナムでも類似した現象が確認できる。文化のハードとソフトの問題は、茶文化のみならず、他文化について考えるときも念頭に置かねばならないことで

100) 小林，前出。

101) 江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典 2 教訓・行儀作法』ならびに『江戸時代女性生活絵図大事典 2 家事・諸芸』（大空社，1993年）。

ある。17世紀に日本の茶道界がベトナムで注文生産を行った茶陶<sup>102)</sup>も、大きく俯瞰すれば、日本に輸入された中国産陶磁器などの唐物指向から発展した嗜好と理解でき、陶磁器輸入が引き超した独特の文化的適応と言い換えることもできる。

ところで、国家儀礼、家庭儀礼ともに茶礼が深く根付いたにもかかわらず、茶飲にこだわった庶民文化がさほど深くは発達しなかった朝鮮と、逆に国家儀礼や儒教関連の儀礼に茶礼が最終的には根付かず、社会階層を超えた根付き方をした茶道や庶民や文人の文化として根付いた振り茶や文人茶の発達をみた日本は、非常に対照的である。このことは、両言語間の茶に関することわざ数の差にも表れている。朝鮮の通信使も日本での茶飲の根つき方に驚いた記録を残しているから、この認識は的を得ていると思われるが、なぜそうした相違が生じたのであろう？日本の方が相対的に温暖であるから、茶栽培が広く行えたという違いのみに帰することができない文化環境や文化認識の違いがあると思われる。

朝鮮と日本のもう一つの違いは、女性と茶の関係にも表れている。茶を饗応する女性自体を卑しき身分として捉えていった朝鮮と、茶飲文化自体は身分差や階層差をさほど現さない文化を築きながらも、茶で他人を饗応する文化を大事な習慣と位置づけつつ、それを理由に女性全体を男性に服従させる存在として特化させた日本は、決して文化的に類似しているとはいえない。

また、茶が女性を家庭から外の世界へ出ていくことに寄与した西洋と、長い間女性は家の中で茶を飲むものとされていた中国の対称性も興味深い。これは接客や外交と性差、さらには新参文化への対応や適応の性差を考える上での興味深いテーマになる。接客や外交も基本的には、未知なるものへの対応であろう。女性が家などの限られた場所で限られた人物としか接客ができないか、家の外でおおびらにできるかの違いは大きい。同じ封建時代においても、ヨーロッパと中国では、新文化導入にあたって、その先導役に女性が存在したか、しなかったのかの違いに還元できるともいえる。

ヨーロッパの場合、全く見知らぬ植物から生産された飲料ゆえ、有害か薬かといった論議の対象になりやすかったことは、茶栽培が可能で伝統的薬品の飲法などに近かったアジア諸国とは対照的である。故に、神秘性が高まり、貴重な奢侈品としての位置づけも容易に行われたと考えられる。

また、茶器の変化や紅茶の呼称に見られるように、アジアからヨーロッパへの文化の伝播やその変容ばかりでなく、茶や茶器の交易を通じて、ヨーロッパを起点としてアジアで文化変容が起きた場合もあることは、とかく近代以降の大規模交易が単線方向的な商品の移動として単純理解に陥りやすいことに対して注意を喚起している。商品移動にも必ず文化的交渉や変容がともなうという好例であろう。

(西村昌也)

## 後 記

資料収集や研究遂行にあたって、以下の方々にお世話になりました。記して謝する次第です（敬称略）。

小林善帆、角山栄、谷晃、西野範子、野間晴雄、原田正俊

102) 本紀要の西野論文参照。